

1歳頃から「自閉症スペクトラム障害」を疑うとき

マスコミなどで「自閉症スペクトラム障害」の早期発見が報道されることも増えていきますので、そこで紹介されるさまざまな症状の話聞いて、不安になることがあるかもしれません。

わが国では一般的に、自閉症の診断がなされるのが、アメリカに比べて遅いのです。アメリカでは「疑ったら対応を考えよう」と言われるようになってきましたが、わが国では、まだまだ「様子見」が多いようです。この時期の自閉症には、次ページに挙げたような症状が見られることがあります。

視線を合わそうとしない、子どもを見つめても別の方を見ている、声を出さないのでもとても静かに感じるということもあります。声を出しても、単調な唸り声だけということもあります。表情の変化が少なく、なかなか笑顔が出ません。呼びかけたり手を振ったりしても反応がありませんし、真似をしようとしてもしてくれません。

いくら呼びかけても反応しないのに、特定のぬいぐるみなど、物に対する執着がある場合もあります。たとえば、積み木を車に見立てて走らせようとする仕草などがある

1歳頃から見られる症状

- 視線が合わない。
- 声を出さない。
- 表情の変化が乏しい。
- 模倣（動作や音声）をしない。
- 人より物に興味がある。
- 見立て遊びをしない。
- クレーン現象がある。
- 触られる、抱っこされるのを嫌がる。

りません。歩きはじめている場合には、クレーン現象（言葉が話せないので、喉が渴いたら母親の手をとって冷蔵庫のほうに連れて行こうとするなど）がある、触られたり抱っこされたりすることを嫌がり、泣きはじめるとあやしても止まらないかもしれません。

たしかに、こんなことがたくさんあれば、自分の子どもと感覚的に「つながっている」とは感じにくいですし、「このままでは自分が変になりそう」と感じてしまうかもしれません。

でも、方法があります。その状況を放置するのではなく、「何とかできること」を探しながら、少しずつ実行できることを見つけましょう。